

第3回 散居村の保全と活用シンポジウムの記録

- 1 日 時 平成25年1月27日（日）13:30～16:17
- 2 会 場 砺波市文化会館 多目的ホール（砺波市花園町1番32号）
- 3 テーマ 散居村の活用と地域の発展
- 4 主 催 散居村の保全と活用シンポジウム実行委員会
- 5 後 援 富山県、砺波市、砺波市地区自治振興会協議会、砺波商工会議所、庄川町商工会、特定非営利活動法人 砺波土蔵の会
- 6 これまでの経過 《説明者》 島田 繁則（実行委員会 委員（砺波市企画調整課職員））
- 7 パネルディスカッション「散居村の活用と地域の発展」
《パネリスト》 尾田 武雄 氏（砺波市空き家再生等推進協議会 会長）
川邊 陽子 氏（主婦）
原野 博明 氏（サンエー建工㈱ 代表取締役社長）
本江 哲 氏（㈱となみ青年会議所 砺波コミュニティー委員長）
宗景 昭 氏（㈱日本造園組合連合会 富山県支部長）
《コーディネーター》 出村 忍 氏（特定非営利活動法人砺波土蔵の会 理事）
- 8 主催者関係 《主催者挨拶》 舘 康弘（実行委員会 副代表（砺波市地区自治振興会協議会 前会長））
《閉会挨拶》 中西 美代（実行委員会 委員（となみ野農業協同組合女性部長））
《司会》 構 富士雄（実行委員会 委員（砺波市都市整備課職員））
- 9 参加人数 約190人

10 記 録

◆主催者挨拶◆

構：お待たせいたしました。ただいまから、散居村の保全と活用シンポジウムを始めさせていただきます。私は、本日の司会を務めさせていただきます砺波市都市整備課の構と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、シンポジウムの開会にあたり、主催者のあいさつを本実行委員会 舘康弘 副代表が申し上げます。

舘：皆さん、御苦勞様でございます。

1週間後には立春という時期ではございますが、非常に寒い日が続いてまいりました。また、皆さん方には何かと出にくい時間帯ではございましたが、多くの方々にお集まりいただきまして、本当に感謝申し上げる次第でございます。

本来でございますと実行委員会の代表であります尾田代表が、御挨拶を申し上げるところでございますが、本日はシンポジウムの参加ということで、「私に」とのことでしたので、慣れない者ですが挨拶をさせていただいた訳でございます。

さて、皆さん方にはご承知のとおり、この砺波平野の散居村は、非常に全国的に素晴らしいものであるという景観を皆さんも御存知だと思いますけれど、私たちは、本当に毎日毎日この景観を見ておりますと、慣れと言いましょうか、こんなもんだというような感じを受けているような

ことがよくあるじゃないかなあと思っている訳でございます。

そこで、今回は私たちの景観を、やはり散居の魅力を見直すということと、活用するという事でシンポジウムを開いている訳でございます。

こうした「散居村の魅力再発見」と「散居村を生かした経済の活性化」をテーマにいたしまして、2回のシンポジウムを開いた訳でございます。特に、昨年の11月には、2回目のシンポジウムにおきまして、色々と御意見を賜った訳でございます。その中におきまして、「私どもが地元において無関心でなかろうかなあ」と、こういうような御意見が出ておったことも皆さん御存知だと思います。

そこで、「我々も無関心ではいけない」と、こういうような気持ちを持ちまして、今日3回目のシンポジウムを開いている訳でございます。皆さん方には、市民自らが、保全活動に御協力して意識を高めていただければ、よろしいのではないかとということでございます。

今回は、このシンポジウムを総括といたしまして、新たな出発点とするということで「散居村の活用と地域の発展」をテーマに、市内に在住の各方面の方々にパネルディスカッションを予定している訳でございます。5名の方々には本当にお忙しいにも関わらず、御出席していただきましたことを厚く御礼申し上げる次第でございます。

限りある時間の中ではございますので、皆様方には、それぞれの立場から、地域においての新たなまちづくりの参考にしていただければという風に思いまして、実りある会になりますように皆様をお願いを申し上げる次第でございます。

終わりになりますが、本日のパネルディスカッションにおいて、パネリスト並びにコーディネーターを務めていただきます皆様方に、心から感謝申し上げます。どうか、今回も素晴らしいシンポジウムになりますように、皆さん方に対しましても温かいお力添えをいただきますようお願い申し上げます。本日は代表に代わりましての挨拶に代えさせていただきます。

どうかひとつ、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

◆これまでの経過◆

構：今ほど、挨拶にありましたように、これまで2回のシンポジウムを実施し、今回のシンポジウムにおいて、総括することとしております。

そこで、これまでの経過につきまして、本実行委員会の島田繁則 委員が説明いたします。

島田：それでは、私のほうからこのたびの「散居村の保全と活用シンポジウム」を開催した経緯から、これまでに2回実施した内容について、説明をさせていただきます。

【1頁】

※【〇頁】は、スライドのページ番号です。

皆様が御承知のとおり、ここ砺波平野には、世界に誇る日本の農村を代表する原風景「散居村」があります。これまで散居村については、長年にわたって研究や学習会が積み重ねられてきたものの、そこに住む私たちが、散居村の成り立ちや魅力などへの関心が薄いように感じております。こうしたことから、砺波を象徴する「散居村」を現代生活に調和した形で保全することで、経済の活性化を導き出すことができれば、多くの市民に散居村についての理解や関心が深まるとともに、散居村に住むこと自体がブランドになるのではないかと考えます。

【2頁】

したがって、これからは研究等から実践や行動に移し、更に散居村に関する市民意識を高めて地域の活性化に結びつけるため、昨年7月に実行委員会を立ち上げ、市民と行政の協働によるシンポジウムを開催してまいりました。

【3、4頁】

第1回目のシンポジウムは、昨年9月23日に、この会場において「散居村の魅力再発見」をテーマに開催し、尾田武雄実行委員会代表の挨拶のあと、基調講演を行いました。

【5頁】

講師として、職藝学院教授の上野幸夫先生から、「世界に誇れる日本の原風景『散居村』～砺波平野の歴史・顔・財産～」と題して御講演をいただきました。

先生は宮城県の御出身であり、高岡市の国宝瑞龍寺の修復を手がける縁で富山県にお越しになり、その時、散居村の景色に感動したとのこと。また、ユネスコからの来訪者にも散居村を紹介したほか、これまでに多くの方々を案内し、この素晴らしい景色に感嘆されているとのこと。一方、市民の皆様は、見慣れた風景であることから、当たり前空間と感じている。とのことでありました。

講演では、多くのスライドを用いて、散居村における特長的な家やその造り、装飾箇所、地蔵様など紹介いただきました。

【6頁】入道家（創建当初は茅葺き屋根、蔵なし、石積みなし）

【7頁】ケヤキ作りのワクノウチ（湿気の多い雪に耐える）

【8頁】座敷（ナゲシが上にもある）

【9頁】座敷（欄間とナゲシが上にもある）

【10頁】ドヒサシ（半分が縁側と土間）

【11頁】長屋門、土蔵も多くある

【12頁】黒漆喰の本磨きの土蔵

【13頁】灰小屋

これらは、富山県にしか見ることができない文化である。とおっしゃっていました。

このように明治時代に入ってから、農家においても様々な設えが施されるようになり、三世代かかって造り上げるなど、競い合うように家や門、土蔵、庭などが整えられるようになったことから、職人の技術も向上していったとのことでした。

また、柳田國男氏の著書「美しい村」を引用し、美しい村などというものは、はじめからあるはずがない。そこに住む人が美しい村に住もうと思って努力しない限り、美しい村が出来るはずがないことであり、これまで長い歴史の中で作り上げ、それを守ってきた風景を未来に伝えていくことが必要である。そうすることで、住んでいる方も誇りを持つことができると思うと、まとめられたところでございます。

【14頁】

基調講演に続いてパネルディスカッションを行い、パネリストには引き続いて上野教授のほか、市内で積極的に活動されている砺波カイニョ倶楽部の柏樹代表幹事、庄川峡観光協同組合の川崎理事、鷹栖夜高保存会の寺島前会長の4名の御出席をいただき、実行委員会の構がコーディネーターを務めました。

【15頁】

上野様からは、家造りのこだわりが薄らいでいるものの、若い世代が伝統的な建造物に興味を示してきている。そのためにも、昔ながらの建物を長く持たせる仕掛けが必要となる。また、そうした歴史的な建造物などの景観は、無くなってから気がつくものであり、それでは遅い。

散居村の景色は砺波の顔であり、その顔は都会の人々に、癒やしを提供する空間と成り得る。そのためにも、ブラッシュアップが必要であり、そうすることで四季折々の風景を楽しむことができるスポットとなる。と発言いただいたところでありました。

【16頁】

柏樹様からは、各戸にある屋敷林にはそれぞれの顔があるとともに、約22の効用、効果があり、それを休むことなく行っている。このように、屋敷林は、「耐えながら、助け合って、働き続ける」ことが生き様であるとのことでありました。そして、これまでの恩恵は、農家のみならず砺波平野の住民全てが享受してきているものの、今、問われていることは、カイニョや散居村を壊して、人間だけが安寧に暮らすことができるのか。ということでありました。

このカイニョについては、落ち葉と倒木が問題となっていますが、このことに対しては、個人が頑張るしかなく、その活動の中心は年寄りであるとのこと。その心とは、「落ち葉を始末するのは、人生をたたえる姿である」ことを意識すること。また、各戸に100年以上の樹木が3本以上あれば、風景も見違えるようになる。と発言いただきました。

【17頁】

川崎様からは、観光客の皆様は散居村を案内したとき、一応に驚かれる。こうした感動を生むものが、大きな観光資源となる。また、地域のイベントや祭事によって、地域愛を育むこととな

り、幼少の頃から参加させる必要がある。中でも、地域のアイデンティティが大切であり、そのことにより、地域を見つめ直し、発展に結びつけることができる。また、海外にも目を向けて取り組む必要がある。と発言をいただきました。

【18頁】

寺島様からは、青年団が行っていた夜高祭りを再興し、新興住宅の若者を含め交流が深まった。また、このことにより、小学校のPTA活動の活性化にもつながった。地域の祭を通して、地域の若者のコミュニケーションが深まり、地域へ愛着や誇りが生まれ、発展につながることを確信した。とのことでありました。

【19頁】

いずれにしても、地域への愛着と誇りを持つことが、最も地域の魅力を再認識することにつながり、そして、行動していくことによって、地域の活性化に結びつくとのこと。また、市民の誰しもが豊かで幸せな暮らしを求めていることから、更に砺波というこの地域に誇りを持って、散居村を代表とする個性ある共有資産を生かすことで、経済的に幸せになるのではないかとまとめるところでございます。

【20頁】

続いて、第2回目のシンポジウムは、昨年11月25日に、「散居村を生かした経済の活性化」をテーマに開催し、実行委員会代表の挨拶のあと、基調講演を行いました。

講師として、兵庫県篠山市福住地区でまちづくり協議会の会長を務められていた麻田馨様に、「地域資源を生かしたまちづくり～空き家を活用した地域活性化の取組み～」と題して御講演いただきました。

【21、22頁】

麻田様は、定年退職後に帰郷され、特産物の丹波篠山の黒豆を生産するとともに、地域への熱い愛着と誇りから、様々なまちづくり活動を進めてこられました。この福住地区は市街地郊外にあり、高岡市の金屋町地区などとともに、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定される予定とのことでありました。昨年12月28日にめでたく選定されたということでもあります。

【23頁】

福住地区の地域づくりのコンセプトとしては、農業や自然環境を生かした地域間の交流の促進、歴史的なまち並みや文化の形成など、地域の資源を活用した活動を通してコミュニティの活性化を目指しているとのことでした。

【24～28頁】 福住地区のまち並みや取組状況など

特に、福住地区には、空き家が非常に多いことから、対応策を協議するためワークショップを定期的に行っているとのことでありました。その結果、この1年間に進出した家や企業としては、イタリアンレストラン、ゲストハウス、ガラス工房、配送センター、ギター工房、定住体験施設など、めまぐるしく進展し、人は人を呼ぶものと感じられたようであります。

【29頁】 空き家活用の第1号

【30頁】 イタリアンレストラン

【31頁】 ゲストハウス

【32頁】 ガラス工房

空き家活用の利点としては、地域の魅力が高まるとともに、景観が良くなるということ。また、交流人口も増加してきており、雇用の創出にもつながるとのことでありました。このような取組により、多くの住民も前向きに興味を持っていただき、地域の活性化が図られているとのことでした。

【33頁】

基調講演に続きましてパネルディスカッションを行い、パネリストには木の住まいにこだわった家造りを進められている鷹栖建工の石崎社長、以前に勤務された東京の森ビルでの経験を生かした活動を進められている日ビル商事の北村社長、県内の地域資源を生かしたエコツアーを実施されているエコロの森の森田社長、そして、兵庫県篠山市の景観形成専門員の横山氏の4名に御出演をいただき、砺波商工会議所の余西総務委員長にコーディネーターを務めていただきました。

【34頁】

石崎様からは、家造りへのニーズが時代とともに変わってきているほか、住宅建材等も向上してきている。このような中、昔ながらの大きな住宅は経済的な価値が見出せないが、歴史的な価値としては容認される。また、散居村は個々の住宅における住み方が重要であり、多世代で同居することが経済効果を生む一助となる。と発言いただいたところでございます。

【35頁】

北村様からは、一つのまちを良くする、盛り上げるときには、みんなが同じ方向を向いて、分かりやすい目標があったほうが良い。

個人の活動として、砺波市に素晴らしい屋敷があることを知ってもらう、ファンになってもらう必要があるため、まず知ってもらう取組を行っている。こうした活動を通して、これまで何度も訪れてくれる人がいるということは、砺波市にも魅力があると思っている。また、散居村を守るときには、人に住んでもらわなければいけない。そのために何をしなければならないか考える必要があり、その目標づくりの事例として、島根県隠岐諸島の海士町の取組を御紹介いただきました。

【36頁】

森田様からは、田舎暮らし自体が価値であり、この風景を崩してしまったら絶対に取り戻すことはできない。本当の価値は、そこに住んでいる人の暮らしとか生活であり、観光にも生かされるもの。また、どんな地域に人は魅力を感じるかというと、住んでいる人が幸せに暮らしているところに魅力を感じる。したがって、自分たちの地域を愛していることが何よりの観光資源であり、私たち一人一人が、日常の営みをきちんとやっていくことが大切である。と発言いただいたところでございます。

【37頁】

横山様からは、様々な課題がある社会の中で、地域の活性化のために、企業誘致を要望するだけでは解決につながらないことから、地域のことは地域自らが、行政と役割を分担して取り組むことが大切である。中でも、景観を生かす手段は効果があり、将来の暮らしのレベルを下げない地域を作り出していくことを目指さなければならない。

また、経済の活性化とは、流通性を高めることであり、競争力や市場性を持ったものに変えていく。それを地域住民が主体の所謂、共助として取り組むシステムをつくるように考えてきた。とのことでありました。

ここ砺波の散居村においても、この景観を守る仕組みを地域が主体となって取組み、新しいスタイルを作り出すシステムが必要である。挑戦していくことが大事である。とのことでありました。

【38頁】

そして、このパネルディスカッションのまとめとしましては、散居村を活用して発展するため、人々が幸せに暮らしていくことを前提に地域づくりを進める。

また、散居村を生かした経済の活性化に向けては、様々な価値観や考え方を持つ人たちがいることから、篠山市における取組を参考とするなど風景を生かし、砺波市ならではのまちづくりを進めていく必要がある。ということであり、いずれにしても、市民が議論し合い、散居村を活用する機運を高めていく行動が必要である。とまとめたところでございます。

【39頁】

以上、これまで2回のシンポジウムの経過報告とさせていただきます。

構：今ほど説明があったように、これまで2回のシンポジウムを開催してまいりました。

今回シンポジウムでは、前回までのまとめに基づき、このあとパネルディスカッションを進めてまいりますが、会場設営のため休憩とさせていただきます。

パネルディスカッションは、午後2時から始めさせていただきますので、今しばらくお待ち願います。

なお、後方のほうに写真、パネルを展示しております。後ほど、また紹介させていただきますが、御覧いただければと思います。よろしく願いいたします。

◇ 休 憩 ◇

◆パネルディスカッション◆

構：ただいまから、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

第1回と第2回のシンポジウムにおきましては、先ほど、これまでの経過において説明があったところであります。今回のパネルディスカッションにつきましては、これまでの議論を踏まえ、「散居村の活用と地域の発展」について意見交換を進めることとしております。

それでは、パネリストの皆様をステージに向かって右から順に紹介させていただきます。

はじめに、本江哲様でございます。

本江様は、公益社団法人となみ青年会議所砺波コミュニティ委員長として、地域の有志と共に青少年育成事業などの事業展開を行う中で、「明るい豊かなとなみ野の実現」に向けた取組を実践されています。また、株式会社アルメックホングの代表取締役を務められています。

次に、原野博明様でございます。

原野様は、サンエー建工株式会社の代表取締役社長に就いておられ、となみ散居村ミュージアム伝統館の移築や伝統的なたたずまいを残したリフォームのほか、木材を生かした設計から施工、メンテナンスに至るまでの一貫した体制により、地域に根ざした家づくりを実践されておられます。

次に、尾田武雄様でございます。

尾田様は、砺波市空き家再生等推進協議会の会長に就いておられ、空き家情報バンクの本格的な運用を手がけられていらっしゃいます。また、NPO法人砺波土蔵の会理事長のほか、砺波市文化財保護審議会委員等の役職に就いておられ、本シンポジウム実行委員会の代表を務めていただいております。

次に、宗景昭様でございます。

宗景様は、宗景造園の代表に就いておられるとともに、社団法人日本造園組合連合会富山県支部長の役職を務められ、よりよい緑の環境づくりをめざした活動を展開されておられます。また、砺波市保存樹等保全委員会委員や砺波市屋敷林保全管理検討会委員として、屋敷林の保全や利活用の検討、緑花講習会の講師など地域の緑花推進活動に取り組んでいただいております。

次に、川邊陽子様でございます。

川邊様は、幼少期から中学生までの間、親の転勤により、全国各地の都市で過ごされました。縁あって砺波市内に嫁がれ、散居村の中に居住される中、地域コミュニティの重要性から、地区の若妻会に入会するなど、地域活動へ積極的な参加に努めておられます。

最後になりましたが、コーディネーターを務めていただきます出村忍様でございます。

出村様は、NPO法人砺波土蔵の会理事や砺波カイニョ倶楽部幹事など、郷土に根ざした活動に参画されておられます。また、自らも長年にわたり、散居村に関して主体的に取り組むとともに、地域主催のシンポジウムなどを通して、まちづくりの重要性を広める活動を行っておられます。

それでは、この後の進行は、コーディネーターを務めていただきます出村様、よろしくお願いいたします。

出村：それでは、本日、第3回目のシンポジウムになりますが、始めてまいりたいと思います。本日、コーディネーターを務めます出村です。よろしくお願いいたします。

先に第1回、第2回のまとめについて報告をいただいたところでありますが、それを踏まえて更にということになりますと、なかなか難しい面もございますが、今回は今まで話していただいたことを更に深め、それを今後、更に活用していくにはどういうものがあるのか。あるいは地域の発展について、どう考えていくのかというあたり。1回、2回、今回それぞれ参加者が違う訳でありまして、深めるといってもなかなか、どう深めるかとなります。

今日は今日の参加者の中から御意見をいただき、御参加いただいた皆さん方にとって、今後の散居村をどう保全活用していくかという一助になればと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは早速でございますが、順次また御意見をいただいきたいと思ひます。最初は本江さんのほうから、散居村の活用につきましては、人との交流、交流人口をいかに増やしていくかが、一つのキーワードになるかと思ひます。青年会議所の活動などを通じて本江さんのほうから一言お願いしたいと思ひます。

本江：皆さんこんにちは。私はとなみ青年会議所、本年度、砺波コミュニティー委員長を仰せつかっております本江であります。

当青年会議所は、砺波市、南砺市の20歳から40歳で構成します90名からのメンバーで活動しております。本年も青少年育成事業、地域交流事業等々で、明るい豊かな社会の砺波野を築くために活動しております。本日、どうかよろしくお願いいたします。

まずは個性ある地域を保全する取組として、交流人口という御質問をいただきました。となみ青年会議所の活動の中で、地域を顧みる機会が非常に増えまして、改めてこの地域の良さを実感いたしました。その一つは、田舎でありながらも生活に不自由しないことにあると思ひます。ただ、車がないと生活に支障を来すのかもしれないし、したがって、交通弱者にとっては不便なのかもしれないと考えております。

また、砺波の魅力は交通の要衝地であることから、砺波地方の中核的な商業施設が多いことに加え、散居村などの恵まれた自然環境と居住空間にあると思ひます。これらの魅力を生かさなければ、地域の活性化や発展はないのではないかと考えております。

こうした状況を市民が意識していくことが最も必要であり、市民1人1人の地域愛を深めるとともに、社会全体に広げるなど、地域創造と発展に向けての活動として人づくりを中心に、まずは進めていくことが非常に大切であると考えます。

出村：人があってと言うことでありますし、参加いただいている皆さんをはじめとして市民の皆さんの意識というものを大切に、まいるたいということでもあります。

今回のキーワードは散居村でありますので、散居村というのは、家が散らばっているという散居形態と、もう一つは屋敷林という要素がある訳です。屋敷林ということにつきまして、造園という立場でかかわっていただいております宗景さんのほうからお願いしたいと思ひます。

宗景：皆さんこんにちは。今ほど紹介いただきました社団法人の日本造園組合連合会の支部長を仰せつかっております宗景でございます。どうかよろしくお願いいたします。

当造園組合は、富山県の支部ということで、232社が活躍している訳でございます。先般、昨年の11月にチューリップ四季彩館の前において、庭作り塾ということで全国5か所作らせていただいた訳でございますが、北陸ブロックの中で庭づくりをさせていただき活躍しております。

今日は散居村の景観ということでございますが、私たちは日頃から地球環境、温暖化防止などエコロジーの取組を進めている訳であります。屋敷林はそうした取組の後押しをしているというものであります。寒さを和らげる。暑さを和らげるということで、空気の浄化や循環型の生活の一助というものでございます。

特に、昨年4月には暴風により、屋敷林の全滅という御宅もございまして、ただ倒れたものを切って伐採するだけではなくて、倒れたものをいかに地域で活用していくかということも、皆さんで考えた訳でございます。そこで、秋にカイニョ倶楽部の皆さんが主体となって、これからはスギではなく違う木を植えればどうかということで、植樹会を開催された訳でございます。

このことは、個人の家でメリットだけではなくて、ここ砺波平野全体に与えることを理解しながら、屋敷林を地域全体で活用することも必要でないかなあと思っております。

周辺住民への癒やし、そして地域学習の題材などということでございます。これは、今、保存樹の御宅が何軒かございますが、その中にスギではなくて違う木を植えて、やはり屋敷林の景観を守っておいでる家もございます。そこも見学しながら、砺波を良くしていくことも考えていかなければならないと思っております。

出村：宗景さんのお話にありましたが、昨年4月強風で秋元の元井さんという御宅の屋敷林が、本当

に全滅してしまいました。私も参加させていただきましたが、スギばかりではない屋敷林、今後10年後、20年後、30年後を皆さんの目で確認しながら、新しい屋敷林というものも考えていただければと思います。

それでは、屋敷林といえば落ち葉が大変ということなどありますが、私自身から言いますと今年度は百姓をやめて農作業場が空いてきたなあということがありますので、私のアトリエとはいきませんが、新しい空間を少し整備してみたいと思っております。その中で薪ストーブというものは、一つの流行と言いますか、エコと言う面からも大事かなということもありますし、そんなようなことなどを含めて、新しい住まい方というようなあたりを建築家であります原野さんのほうからお話をいただきたいと思います。

原野：皆さんこんにちは。今ほど御紹介いただきましたサンエー建工の原野でございます。当社は、職人と言いますか大工さんが20名ほどおりまして、色々と伝統的な建物などに携わらせていただいております。ちょっと変わったものでは、南砺市の百瀬にあります利賀山房という大きな合掌造りなのですが、これは国際演劇祭の道場と言いますか、練習場ということで希少な建物を造らせていただいております。先程ありましたように、散居村ミュージアム伝統館は、灰小屋なども全て整備した文化を継承する建物。太田にあります入道邸、これは県の文化財にも指定されていると思うのですが、そういう数多くの文化的な建物を当社のほうで仕事をさせていただいております。

さて、今ほど、暖炉とか薪ストーブというようなお話がありましたけれど、当然、この北陸地方でございますので、寒い冬の生活の中で昔から火というものは欠かせないものであったと思っております。囲炉裏で暖を取るということが一つ。もう一つは砺波地方独特の食文化を作り上げてきて、家族そして地域住民とのコミュニケーションを促進する重要な役割を果たしてきたかなと思います。

今ほど申されたように、最近、煙突のある家と言うか、あれを外から見ると、この家はどのような生活をしておられるのかなあということで、すごく楽しくなりますよね。中はどうなっているのかと色々と思ってみますと、当然、北欧とか欧米とか昔から暖を取るのに、薪ストーブとかそういうものを使っておられたと思うのです。中に入ると、人々が集まって、鉄瓶にお湯を沸かしてコーヒー、お茶が、大変おいしく飲める。最近若い人の場合は、ピザ、お餅とか子どもさんの焼き芋などを食べるなど、そういうことでお持ち成しの際の道具として使用されているのではないかなあと思っております。夜になると赤々とした炎が癒やしを誘って、部屋の雰囲気作りのインテリアとしても重宝されていると、こうした、火の役割を再認識することによって、心豊かな生活を目的とした一つの道具として使われているのではないかなあとは私思っております。

出村：持て成しの空間であり、心豊かな生活と心安らぐ空間ということでの建築も、これから新しい形をもっともっと進めていく必要があるかなあと思いますが、実践していただいているお話を聞かせていただきました。

今日のようにたくさん雪が降りますと、散居村ですと私も今朝から80mの宅道と玄関先まで行きますと100mほどを一生懸命除雪して1時間ほどかかってしまいましたけれど、不便さも色々ありますけれども、他所から来られて砺波に今住まわれている川邊さんのほうから、その当たり砺波の生活について少しお話を聞かせていただければと思います。

川邊：川邊です。よろしくお願いいたします。

先程、紹介もしていただきましたが、幼少の頃から父親の転勤により、いくつかの都市で生活し、中学校1年のときに福井で定住しました。また、家の近くに小学校があったので人と接する機会がたくさんあり、賑やかな雰囲気でした。縁あり砺波に嫁ぎましたが、この地は孤立した雰囲気があるとともに、夜は暗く、とても寂しさを感じていました。また、冬の生活においては、敷地が広いことで雪かきなどが大変であり、自宅に除雪機があることにも驚きました。

しかし、家々が離れている散居村であることから、周囲に気使うことが少なく、家族との一体感があります。一方、近所付き合いが少ないのかと思っていましたら、地域活動が充実している

ことに驚き、主人が子どもを連れていろいろな自治会の行事に参加をして楽しんでいます。

ここ砺波は、のんびりと暮らし、安らぎや癒やしといった精神的な豊かさが実感できます。地理的条件が良く、日常生活に不便さを感じることもないので、自由に移動できる手段があれば生活しやすい地域だと思います。

出村：住み良いという点では、よく言われます「住みよさランキング」という言葉がよく使われますが、これは東洋経済新報社から出ておりまして、最近は少し順位が落ちてきたりと思いますけれど、かつてトップ、常に上位、1位のときもありました。

ただ、経済指標だけを並べて統計数字だけで住みよさというのもどうかという一面もありますけれど、統計数字というものもうまく使えば、住みよさランキングというようなランキングでトップに立つという面もあります。そのあたりを色々見まして、基本的には住宅面積がでかいからいいというものではないので、反面またでっかいからこそ問題があるという面があります。

最近では若い人たちが、外へ出て帰って来ないということなどから、空き家という問題もどんどん出てきております。空き家調査をしていただいた尾田さん、その当たりのことを含めて御意見をお願いしたいと思います。

尾田：NPO法人砺波土蔵の会の御世話をしています尾田武雄でございます。土蔵の会って何、ということですが、昭和61年に砺波が大好きで砺波を愛しているという若い人たちが集まりまして、歴史であるとか地理、民族、そうしたものを勉強しようと会をつくりました。彼此25年になりますけれど、会員数が100名ほどおります。生涯学習団体でありまして、自ら勉強しようとか、みんなで勉強しよう、という感じでボヤッとしておりました。

ところが、平成21年にNPO法人の認可を受けまして、勉強ばかりではなくて、何か実践しなければというときに空き家調査をやらないか、と市のほうから打診を受けまして「ああ、そうだなあ」と、散居村の中に空き家がチラチラと見えてきたなあということも、私たちも関心を持っていました。空き家調査を市と協働ということで3年間行いました。それが、平成21年です。

その平成21年に偶然にも建設業界のほうから「建設業と地域の元気回復事業」という事業がありまして、それに乗らないかということで建設業界と一緒に、空き家調査と民泊事業を行いました。民泊事業は5回行いました。民泊を行いまして、名古屋のほうからであるとか、色々なところから来ていただいたのですが、皆さん方をまず散居村の展望台を紹介すると、「何て素晴らしいのだろう」非常に皆さん感動されるのです。そうすると、「散居村の中を見たい」ということで、決って入道さんであるとか、芳里家、非常に素晴らしいアズマダチの古民家なのですが、そういったところを案内します。ところが、空き家が非常に目立つのです。例えば、入道家のすぐ近所にも3、4軒の空き家があります。空き家が多いなということを感じました。その時と同時の平成21年、11月でしたけれど、市のほうから空き家調査をやりたいということになって、空き家調査をやったのです。会員のボランティアで調査をしたのですが、約180軒位の空き家がありました。これは多いなあということを感じました。市のほうと色々相談し、自治振興会の協力を得て、市をことごとく識解調査という形で各町内会にお願いしまして、キッシンと調査をしなければいけないのではないかとということで調査をしました。すると、約305軒があがってきました。この305軒というのは、各町内からあがってきたのですが、もっと丁寧に調査すればもっとたくさんあるのではないかと思います。

何でこんなことに私が拘ったかと言いますと、個人的なことなのですが、今から30年位前に、私は婦人ボランティアの団体と一緒に石仏調査をしました。10年程掛けましたが、その時に1,300体ほどの石仏を調査し、報告することができました。そう言った調査をするということは、将来的には活用とか、保全とかということにつながるのです。例えば、今から35年位前の昭和55年頃ですが、その当時はまだ高度成長の流れがありますので、そうした御地藏さんにはあまり目が向けられなかった。それでも10年ほど調査しますと、だんだん御堂を改築したり、お祭りが復活したりして、今、非常に大事にされています。ということで、空き家も調査することが一番大事だなあということを思っておりまして、調査を一生懸命に行いました。

それと石仏が1,300体と多いのですが、その多くは幕末から明治期にほとんど作られておりま

す。昭和になってからは、あまりないです。平成に入ってから皆無です。その明治期に、私は非常に興味を持っておりまして、明治16年に家の調査をしたものがあるのです。家の坪数は何坪あるのだろうかということを調査したものがあります。それを見ますと、だいたい砺波地方の家の坪数というのは、10坪から20坪と小さかったのです。それが、砺波の人は一生懸命に働いて家を大きくし、寄棟の茅葺きから瓦になるのはだいたい戦後なのです。アズマダチが増えるのも戦後なのです。そして、空き家になるのは、平成10年頃からグッと増えるのです。この100年の間に砺波がすごく変わったなあとということで、空き家というものが非常に増えている。これは何か砺波の文化が無くなるのではないか、非常に危惧しておりまして、現在はその空き家を調査して、活用して住んでもらいたいというようなことの運動を始めているところでございます。

出村：空き家を使つての民泊ということですが、空いてしまった家を使えるようにするという事はなかなか大変なのですが、過去実験的に行ってきました砺波市での民泊ツアーにつきましては、私ども延べ20人位の方をお泊めしたなあと思いますけれども、生活している家でも大きな家ですから空いている部屋もいっぱいある訳でして、広間や座敷に御客様をたまにはお迎えて泊まっていっていただいてもいいのかなと思っています。ただ、鍵がかからないのは泊まれませんかという人は無理なのですが、奥の座敷に女性の方、口の座敷に男性の方、広間においてみんなで食事し一杯飲む、というような使い方などというのものもあるのかなと思います。空き家になる前から、色々と大きな家であればそのような使い方も含めて、御参加いただいている皆さんにも、今後とも御検討いただければと思います。

今日の課題であります交流人口を増やすという点でも、みんなで考えていく課題、そんなに難しいことではないと思いますので、御検討をいただければということでもあります。

現状について、それぞれの立場から御意見をひと通り伺いました訳ですが、これからは取り組むべき方向性についてのお話をさせていただきたいと思います。

物の豊かさはあっても、心のゆとり豊かさが、というようなことがよく言われる時代、どうしても最近は個人主義的なというような一人の立場でということがよく言われる訳ですけど、この時代においても若い人たちがキチッと集まって、活動しながら今後の砺波のこと、あるいは地域のことを考えていただいている青年会議所という取組の中で、本江さんなどは活動いただいている訳でして、その当たり、今後の活用について青年会議所 本江さんのほうから御意見をいただければと思います。

本江：散居村の活用に関してですが、この議論を進めていく上では、課題をしっかりと整理する必要がありますと思います。「砺波」と「散居村」というネームバリューは、何に活用し、どのように生かすのかという手法が、まず必要ではないかなと思っています。また、そのことによって、どのようなまちづくりを進めるのか問われており、いかに共通認識を図るのが重要であるかと思っています。

やはりこれには、ある程度の仕掛けが当然必要になってくることであると思いますし、勿論、どのターゲットに絞るかも非常に大切なことになると思います。先程もありましたが、色んな芸術品や工芸品だとか、ガラス工芸とか色んなものにターゲットを絞って、散居村を活用していただくということも一つ手だとも思いますし、また、砺波、南砺でありますので、例えば空き家で和紙を作っていただくなど、南砺とのコラボレーションも非常に楽しめるのではないかなあと思っております。

我々となみ青年会議所は、まちづくりと言うよりも、どちらか言うと人づくりに非常に重きをおいている団体でありまして、人づくりからまちづくりに発展していくものだと思っております。

コミュニティの話になりますが、町内会や地区などの小さなエリアから、そこに住む多くの住民の皆様が問題意識を持って、個々に色んな議論をしながら、まちづくりを考え取り組んでいけないいけないと思っております。こうした中で、今まで当たり前と思っていたコミュニティではなくて、その中には色んなサークルや集まりがあるものだと思っております。また、新しい集まりやコミュニティづくりも、昔や前の意見にとらわれず新しい取組をしていけば、また色んな意見が出てくるのではないかなあと思っております。

そのためにも、散居村については、地域の中で住民が議論する機会からモデル的な事例を作り上げ、ビジネスに波及させていくことが良いのではないかと考えています。また、色んなPRの仕方もあると思いますが、メディア等を使って、色んな手法をもってPRしていけばいいのではないかと考えております。

出村：ビジネス化するという事は、なかなか大変なことでありますけれども、事業家としての青年会議所メンバーあたりが新しく提言をしながら、新しい取組を模索して行っていいただければつながっていくのかなあと考えています。

散居村については、調査研究という部分は随分今までもされてきていると思いますけれども、これからは、実践行動につなげていくということが大事になってくるのだと思います。生活スタイルが変わっていくという中での住み方、砺波流の住み方というものがある訳でして、建築家としての原野さんのほうから最近の新築の状況、あるいはリフォームの事例など具体的なものなども含めてございましたら、お話をいただければと思います。

原野：最近の傾向は、北陸のこの寒さ対策というか、それが一番のネックかなあと考えておりまして、冷暖房というか空調関係に対する効率的な住環境が、一番重要視されているのかなあと考えております。

中でも、キーワードはエコということでございまして、最近は素晴らしい複層のサッシが出回っており、そういうものの中で高断熱の家造りというか、様々な方法で色々取り組んでいるように思います。そして、また太陽光とか、高蓄熱機器とか、そういう再生エネルギーの活用が推進されております。先程、暖房のことで言い忘れましたけれど、私の思いとすれば、ヒートポンプというものがございまして。空気中の二酸化炭素とかを真空にして圧縮することによって熱が出るのですが、そういうものを利用した床暖房、これが最近ものすごく普及しております。そういうものを活用することによりまして、温かくて大変住み良い家造りを今、一生懸命に取り組んでいるところでございます。

そして、新築について私が思っていることなのですが、建替えの新築というものが当然ある訳でして、その中で皆さん方の家でも、ワクノウチや古材とか、そういうものを数多く持っておられる家もたくさんあると思うのですが、なるべくそのようなものについては、すぐに壊さないということで色んな方法がございまして。先般もワクノウチや古材というものを玄関とか、居間等々に使うことによって、新築でありますけれども砺波らしさというもの生まれてまいります。そういう形で取り組んでいただけたらいいなあと、私は個人的に考えております。

また、リフォームにつきましては、正直なところ耐震補強でありますとか、基礎の補強などに大変なお金がかかる訳でございまして。しかしながら、色んな基準を全部満たすということにつきましては、お金がかかる訳でございましてけれども、例えば耐震であれば弱いところのみを補強するという方法もございまして、思えば色々あると思いますけれども、そのようなことをキチッと調査をして作り上げることによって、安くリフォームができるということもございまして。

そういうことの中で、これからはそんな色んな事例、砺波の地域の風潮にあったような住まいづくりをこれからも紹介していくことが、私どもの務めでないかなあと考えている次第であります。

出村：大きな家を全部どうするというのは、なかなか大変ですけど、夏であれば戸を開けっ放しにしておけば、それなりに涼しいということがあるかと思っています。特に、こういう寒い時期の昔からのお家というものは、リフォームという場合には直接生活する部分、所謂水周りと言われる流し、トイレ、御風呂、あるいは家族が生活する居間という当たりを最小限に限ってリフォームをして住みやすい生活をしていく、という住まい方もあるのかもしれない。そのようなこともこれから我々自身、住民自身が建築屋さんや御相談しながら、そういうリフォームという新しいものも考えていかなければ、大きいから全部だめだということではないでしょうし、家を潰して新しい小さなものを建てればよいということでもないと思いますので、今あるものを生かしてリフォームしていく形というものも建築家の皆さんにも提案いただきたいと思いますし、住民として

意見を述べていきたいことかなあとと思います。

多様な活動をしておられる尾田さん。今日は、空き家に限ってテーマをお願いしている訳ですが、尾田さんのほうからその当たり、散居景観の活用ということで御意見をいただければと思います。

尾田：空き家についてお話したいと思います。空き家対策に関しましては、空き家情報バンク、佐々木邸の砺波暮らしの体験宿泊、色んなことが行われようとしています。また、行われております。

空き家で一番ネックになることは、305 軒とたくさんある訳ですが、その一番問題は持ち主の意識が非常に薄いということ。空き家が地域に迷惑を掛けているという認識がないということ。持ち主にとっては、思い出をそのままにしておきたい。そっとしておきたいというような思いがあるように思います。また、仏壇であるとか、持ち主の家具、そういった物がそのままになっているのです。空き家を貸したい、売りたい、それから空き家に入りたい、そういった方がおられるのですが、なかなかマッチングができない。この原因は仏壇がある。持ち主の家具がある。ところが持ち主にとっては、家具であるとか、仏壇であるとか、すぐに片付けるということがなかなか資金的にも大変ということで、こういった面に何か行政のほうから支援があれば、いいのかなあと思ったりもしております。

それと話が変わりますけれど、昨年何回か民泊であるとか、東京のほうから若い人をお迎えしました。特に、2回目に行いましたとき、北村さんという方が森ビルに勤めておられたという関係で、東京の六本木ヒルズですか、そういった若いベンチャーの方が去年来られました。その方々と色々お話したときに、富山から東京は飛行機で1時間なのです。実に近いということで、「大きい屋敷を借り上げて事務所に使いたい」というようなことを言っておられた若い方々が、何人かおられました。

実際、「本当に使うのか」というようなことをお聞きしたりしているのですが、「本当に欲しい」と言っておられまして、「東京で1か月仕事して、また砺波で1か月仕事する。こんな素晴らしい贅沢はないな」というようなことを言っておられました。そういったことも大事なかなあといい、それをうまく砺波で事務所を開いてもらうということもいいかなあと思っております。

城端町にアニメの若い人が来て、今、城端町がアニメで非常に活発ですけど、そういった何か変わった人、1人が入ると、その周りの人たちが入ってくるという、何はそういった仕掛けがあればいいかなあと思っております。

それと会場の後ろのほうに綺麗な写真があります。この写真というのは、民泊に何回も参加していただいております名古屋の下里さんという方が、「今日、シンポジウムがあるよ」ということを出村さんのほうから言いましたら、昨日泊まって、今日参加するために来ておられます。また、写真を持って来ておられます。砺波の素晴らしさ、こんな素晴らしいところがあるのですよということで写真を持って来て、砺波の人に再認識してもらいたいということで来ておられます。そんな感じで砺波以外の人たちが、「非常に砺波が素晴らしい」と言っておられますので、これは何かならないかなあとと思います。

私は工場誘致も大事なのですが、人材誘致、アニメをやる人とか、アーティストとか、そういった人たちを誘致できれば砺波が面白くなって、ひとつ上の砺波ができるのではないかなあと思っております。

出村：司会のほうからは後ほど、下里さんの御紹介を、ということがあったかなあとしますので、今ありましたようにたくさん写真を持って来ていただいて、展示をしていただいております。県と南砺、砺波で名古屋事務所に名古屋のアンテナショップを開いておりますけれど、下里さんにつきましてはそんなところにも、よく顔を出していただいて、この中の写真の何点かも向こうのほうで展示し、名古屋において写真でのアンテナショップみたいな形で砺波の発信をしていた。我々にとっては、とてもありがたい、大切な方かなあと思っております。後程、一言できればいただければと思っておりますけれど、ゆっくり写真も見いただければと思います。

この後は、人材誘致と言った話もありましたが、家の屋敷林にこだわって言えば造園の立場からの意見も伺っていききたいかなあとと思います。宗景さんの方から屋敷林や木々の活用に関して、

一言お願いしたいと思います。

宗景：最近は、屋敷林が邪魔で無用の長物という形で皆さん思われております。それで倒木やら落ち葉がひどくて、そんなもん切ってしまえと、私らもはさみではなくて、チェーンソーを持って行くような時代になっております。やはり、住宅の中に木々がないと生活空間が生きてこないということもございます。そういうことで、癒やされる空間を創出するためには、昔はスギの木を植えてアンちゃんやら、オッチちゃんやらの家を建て直したりするときに使ったりしていましたが、今、住宅事情も変わりまして、色んな建材等もでき、先程も住宅のことで言っておられますが、寒さにも耐えられる生活空間が良くなるような住宅の建て方でございます。今は、昔のアズマダチはなくて、垂直水平、真四角の家ができておる訳でございます。そうなってくると、植える木も考えていかなければならないじゃないかなと、そういう風に思っている次第でございます。

スギでなくて、何を植えればいいのかということで、皆さん方から良く相談を受けますが、広葉樹であり、落葉樹であり、実のなる木、それで紅葉して心が癒やされる。要するに、最初から紅葉する木もありますが、モミジなんかは新芽のときは黄緑色、そのうちに赤く、青く、緑になりまして、最後には綺麗な紅葉をして落葉して、冬には陽を当たると、そのような形の木を植えていかなければ、この散居村の景観というものはなかなか残していけないのではないかなあと思っております。

それと維持管理に負担のかからない木ということでございます。そうなってくると、皆さん方、食欲のほうで実のなる木、要するにブルーベリーとか、食べながら庭を楽しむ、散居村の景観を楽しむことが必要でないかなあと、そのように指導している訳でございます。

それと広葉樹でも、落葉樹、今のヤマボウシとかは、実もなり紅葉もいたします。ツバキは紅葉でなく常緑で花も咲きます。そういうような形で色々と吟味しながらやっていかないと、家は建てるけれど木が邪魔だからということで緑がなくなってしまう。そうではなく、1人1人が緑を眺めて生活していくことが一番大事でないかなあと思っております。

住宅の建て方のほか、庭造りにおいても変わってきており、従来の住宅が小さく建て替えられており、その中に緑の空間が出来ています。しかし、車社会の中で車庫を作ったり、舗装したりしてだんだんと緑の空間が少なくなっています。そういうことも踏まえながら、住宅の三世代、四世代の中で癒やしの空間を作っており、庭造りは大分変わってきました。今は玄関、前庭ですね。毎日、出入りします。そういうようなところを変化に富んだような庭にする。あとは、ダイニング、キッチンのほうで庭を眺めながら飯を食うとか、そこで一家団らんを設けて、「あそこに落ち葉があるな、拾ってこよう」とか、「実がなっとる」とか、そのような形で砺波の景観を残していかななくてはならないと思っております。

それと空き家対策に関して言われたのですが、外ばかりでなくて街の中にも、非常に空き家もあります。その中で、空き家を利用して、一部は壊さなくてはならないところもありますが、そこにミニ庭園を造って、皆さんがそこで名物を食べながら団らんする。街の中に人を呼ぶことも大事でないかなあと思っております。

砺波の個性を作っていくことは、なかなか一遍にはできません。砺波は特に、生け垣の奨励をしている訳でございます。ほかへ行くと、「あんたら、砺波でそんなことやとるがけ」と言われます。生け垣をやることによって舗装された道路が、昨年のような暑い夏は何度か気温が下がります。そういうことも踏まえて、どんどん奨励していただきたいなあと思っております。

そのほか、色んな木の植え方もありますので、最後に質問があればお伺いしたいと思います。

出村：樹木の専門家でありますので、宗景さんに限らず、造園屋さんなどという職業の方々にも親しく声かけをしていただければいいかなあと思います。

私自身、土蔵の会であるとか、カイニョ倶楽部とかいうような会にも参加させていただいております。かつて、砺波地方で分家をしたときには、次男、三男が農作業に忙しく走り回っているときに、親元の親が新しく分家した屋敷に植える木があるという話を聞いたことがあります。それは、カキの木とイチジクの木であるという話でした。それは、今のようにおやつがふんだんにある訳でない時代に、秋作業というのは手間暇がかかる仕事でありますから、その実のなる木を

植えることによって、イチジクであり、カキの木であり、カキの木も早生、中生、晩生、渋柿であれども、つるし柿にして冬場にも食べられると。そのようなことなどもあって、随分重宝されてきたという風に学びました。昭和の40年代位からほ場整備が進み、車社会になりましたが、それまでは、玄関先の木が大事だということもあり、古い農家であれば庭の真ん中にカキの木がありました。そのカキの木は、実がなるということで、今なら虫対策とか色々ありますけれど、当時は実のなるということでのありがた味と、暑い夏には玄関先に、葉っぱを茂らせて日陰をつくらせている。さらに、日射しが恋しい冬場には、落ち葉になって幹だけになりますから、日当たりが良くなる。玄関先にも良く日の光が当ること、庭の真ん中のカキの木は非常に重宝していた。1本の木が何役も果たしていたという時代があります。

さらに、馬で耕していた馬耕の時代ですと、この地方ですと馬を能登から借りてきたりする訳ですが、借りてきた馬を1日だけ自分ところで大事にお預かりして、田んぼに使う訳ですが、休憩時間とか、昼とか、朝晩になりますと、庭の真ん中にあるカキの木に縛っておいて、御記憶のある方があると思いますが、たいてい庭の真ん中のカキの木は1mから1.5m位のところに、何かコブコブになっているところが残っていたと思います。あれはロープで傷つけられたカキの木が、少し抵抗して皮膚が欠けた部分、コブコブになって残っていたものだと記憶にある方も多いと思いますが、かつてはそのような使い方がされていた。今は、虫対策であるとか、おやつもいっぱいあるし、特に車社会になって、庭の真ん中のカキが一番邪魔がられて、真っ先に切られてしまったと思う訳ですが、その当りは今ような木、ブルーベリーとの提案もありましたけれども、新しい庭造りというものも考えていただいて潤いのある心豊かな生活を求めるというのも課題かなと思います。

そういう意味では、越して来られましたけれども、決して団地の生活ではなく、古い屋敷の中で、今生活をしておられる川邊さんから少しお話をいただければと思います。

川邊：カキの木ということで、家にもカキの木が1本植えてあります。去年の秋から私もプルーンの木を2本買いまして、今育てている最中です。実のなる木は、収穫の喜びや食べる楽しみがあり、子どもたちの成長過程にはとても良いことだと思います。

また、広い敷地ということで、子どもたちが楽しく遊んでおり、親にとっても安心できます。こうした広い空間があることは、散居村の中の1軒1軒が保育所のようなものであり、田んぼや畑など自然と触れ合うことができ、穏やかな人として育まれることを期待しています。

現在、主人の親と同居しており、気遣う面もありますが子どもたちの成長にはとても良いことだと思います。また、地域のコミュニティから、子どもたちはより多くの方々と接する機会があります。このことにより、地域の伝統や文化を学ぶことができるなど、地域の連帯感を活用することができないでしょうか。

こうした住環境である散居村をどのように生かすのかとなると、まだ住み継いで浅いため明確な意見を言えませんが、子育て環境に良いところであることは感じております。この魅力を広くPRしていく必要があると思います。

出村：「1軒1軒が保育所のような」ということでありましてけれど、私が考えてみますと、1間2間のアパートではなかなか子育てとなると、泣いたり、色んなことがあったり、走り回ることもできないこともあると思います。そういう意味では、「保育所のような砺波散居村」というのもキーワード的に面白い表現だなと思います。子育て環境にも良く、心が休まる空間ということで考えて行きたいと思います。

次に、更により具体的な住まい方、具体的にどうして行くのか、というのが課題としてはあると思う訳で、これからはそれぞれパネリストの皆さんから、今後、具体的な取組について発言をお願いしたいと思います。

住宅面での活用ということで、原野さんのほうからお願いしたいと思います。

原野：散居村での暮らし方や住まいづくりというのは、やはり多種多様と言いますか、個人の価値観によって作り上げているものでありますから、一応に提案できるものではないと思います。その

ような中で、地域の特性に合った様々な暮らし方を紹介する、例えば「散居村の住み方の創造塾」と言いますか、そのようなものを企画していくことも一つの話かなあとと思います。

砺波の環境から言えば、ほかの南砺市、高岡市、色んなところがありますけれど、本当に豊かな自然であったり、清流庄川であったり、水のおいしい砺波野で、砺波平野で作り出す豊かな食文化等々からすれば、砺波に住みたい方はたくさんいらっしゃると思うのです。色んなことを企画して、こういう活動をして住まいづくりができるのだよと、市内外に情報発信をして、砺波の魅力を市民の共通認識のもとで、また発信していくことが大事かなあと考えております。

私どもの業界としては、先程言いましたように大きな家を管理するだけでも大変なお金がかかる訳でございます、そのようなものについて色んなローコスト、そういう住宅の改修とか、そういう事例を挙げて三世代、そして住み継いでいく住宅を積極的に提示していくことが大事かなあとと思います。

アズマダチとかの伝統ある建物があります。本当に壊してしまえば、ただのゴミになってしまう訳でございますが、先程言いましたように外観を生かしたリフォームとか、エコ循環型を意識したリフォームも推奨する。色んな難しいところがあるかもしれませんが、是非、そういう物件については、支援制度を整えればいいなと私自身は考えております。そして、日本一大きな屋敷と住宅が大きいというところを利用して、一部を事業者に貸し与えるとか、そういう事業も、もっともっと発信していく必要があると思います。電子機器等や色々とパソコンでできる時代になりまして、また、社会資本の整備によりまして都会から来るにも近くなった訳でございますので、都会には見られない癒やしの空間の中で仕事をしたい方もたくさんいらっしゃいます。こういうことができるよと、発信していくことでなかろうかと考えております。

いずれにしても、散居村を楽しむということ。そして、散居村で豊かな暮らしをするということについて、まちづくりのテーマが必要かと思われます。

出村：建築の立場からの実践、行動に結びつく話ということでもあります。伝統的家屋などのリフォームにつきましては、地域の個性、散居村の活用ということで大事な取組になって行くのだという風に思います。

それでは、まちづくりは人づくり、人づくりからのまちづくりという青年会議所のほうで、これを機会に前進するポイントが何かございましたら、本江さんのほうからお願いしたいと思います。

本江：非常に難しい問題ではありますが、やはり最終的には、まず市民の皆様の熱い思いが最も大切だと考えます。まちづくりへの取組は、行政など一部の関係者による取組だけではなくて、問題意識を持った人、また、散居村のみならず、あらゆる分野でまちづくりを考える母体も必要であると思います。

また、こうした取組を進めるうえで、先程支援制度の話がありましたが、当然、資金が必要になってくるのではないかと考えております。その際に関しては色んな人に御世話していただければと考えております。そのためにも、多くの市民の総意が得られる目標を掲げ、資金調達から進めることも重要だと思っております。その資金を有効に活用することで、新たなビジネス展開が期待できるのではないかなあと考えております。

全国各地で市民協働のまちづくりにより、いくつも成功している事例があります。市民の皆様は、ただの傍観者ではなく、主体的に活動を通じて地域づくりの一員となる機運を高めていかなければならないことも大切なことだと思っております。このシンポジウムも、そうした一環であると思っております。そのためには、顔が見える範囲の中でのコミュニティで議論していくことが最も大切であり、地区単位や自治振興会単位、また先程申しました様々な小さなコミュニティでいいですが、色んな取組により成功すれば、波及していくものではないかなあと考えております。その取組に老若男女が問わず参画し、生業をもたらすことが理想であると思っております。そのことによって地域の発展につながるのではないかと考えております。

特に、散居村は、色んな名産物と違って、運ぶことができない砺波の特産品であると思います。やはり、ここへ来て堪能いただくしかない商品であると思いますので、この商品を題材に、景観

や民泊などに生かし、新たなビジネスとして経済の活性化つなげていけばいいのではないのでしょうか。

いずれにしても、人づくりから砺波の散居村を活用していきたいと思いますし、今後、我々となみ青年会議所も人づくりを通じて、明るい豊かな砺波野づくり、まちづくりを目指して、更に頑張っていきたいと思っております。

出村：運ぶことができない砺波の特産品という話がありましたが、富山で言えば今どきですと、氷見の寒ブリは東京でも、大阪でも食べられます。沖縄まで行っても食べられると思います。ただ砺波の散居村というのは、逆に東京でも大阪でも味わえない特産品。商品という言葉がありましたけれど、ここにやっぱり、来ていただく。来ていただいて、それをどう対応していくかという当たりが、一つの課題になっているのかなあとと思います。

先般、新聞の切り抜きをしたのですが、そういう意味では、新幹線の開業の前に富山の魅力アップが必要だということで、シリーズが先般から始まったローカル紙の切り抜きなのですが、その記事を書いている人の言い分からすると、都会風を気取って起こる勘違いがあるのではないかと。宣伝が下手というのは言い訳でしかない。もっと自分の足元の宝物を見つめ直して、いいものがあるのだと我々自身が気付かなければならない。というようなことが書いてありました。思わず見出しを見て切り抜きをしたのですが、私たち自身、住んでいる我々自身が気付いていくことが大切なのだろうと思います。人口の少ない我々のところでは、課題も多いですが、何か支援となると行政に頼りがちですけれども、市民、住民の力で考えていく新しいシステム作りというのもそういう意味では、課題になってくるのかなあとと思います。

そのためには、日頃からのコミュニケーション、コミュニティというものが、大事になるということだろうと思いますけれども、そういう意味では、外から来られて砺波を満喫しておられるのか、色々重たいものを感じておられるのか分かりませんが、川邊さんのほうからお願いしたいと思います。

川邊：見知らぬ土地に嫁いで来て、いっぱい不安を抱えることもありましたが、主人や両親などの家族の理解と協力で、その不安は解消されていきました。その後、子どもが生まれてからは、地域の行事に参加するようになり、近所の方々にも支えられてきました。子どもが幼稚園に通うようになってからは、私自身の行動範囲も広がりましたし、今では子どもが主役の生活となり、幼稚園などで知り合った方々と活動を楽しんでいます。話題としては、子育てに関することが多く、散居村の中で、のびのびと育っていることが大きなメリットだと思います。

また、砺波においては、保健や医療などの成長を支援する制度も魅力的だと思います。私の実家のほうの友人に聞いても、砺波市はとても医療などで充実していると感じています。

特に、子育てに関しては、共働きのため両親の協力にとても感謝しており、穏やか人づくりのためにも、ここ散居村には大きな家があるのだから多世代での同居がいいと思っています。

また、夫婦と子どもだけの世帯もあるので、子育てをキーワードにした地域コミュニティを構築することも必要だと思います。しかし、地域内での連携を重視し過ぎて、過重な負担とならないように進めていくことが大切だと思っています。

出村：私自身も今日は、地元の自治会の総会の日でして、終わったら、飲み会だけは行こうかなあと考えていますけれど、今日参加の皆さんから言えば、川邊さんのような方を迎える立場でありますので、新しい方々ともよく話し合いをして、その人たちを受け入れられる地域づくりというのも、我々にとっての課題であろうかと思っています。今日は、地区の振興会長さんとか、町内会、色んな各種団体の関係者もたくさん参加いただいていると思います。新しい方々とどのようにコミュニケーションをもっていくか、子育てとかを含めて、地域で子育てとかを含めて課題であると思いますので、これからもよろしく願いしたいかなあとと思います。

川邊さんの場合は、同居のメリット。どちらかというと最近では、結婚するとアパートに出て暮らすという方が多いと思いますけれども、川邊さんのように同居のメリットを話していただけたらいいなと思います。そのような家庭がもっとも増えていけばいいなと思いま

す。親子関係というものも、そういう意味では大事なことになってくるのかなあとと思います。大きな家、大きな屋敷を保育所ということが先程もありましたけれど、散居村の保育所として活用していける暮らしが実現できれば子育ても安定するのかなあとと思います。

それでは、子どもの遊び場とか、保育所的なということもありますが、その屋敷林、広い宅地の中で緑があって、屋敷林があってというような当たり、緑化に関するアイデアなどにつきまして宗景さんのほうからお願いしたいと思います。

宗景：これからの散居村の形態を維持していくには、家族全員で木を植えて手入れをしないと、そして楽しむという形態にもっていかないと、この屋敷林も育っていかないのでないかなあと考えています。昔はオヤジさんが、木を植えて手入れをすると、奥さんも誰も手を入れることができなかった。最近はそのではなく、そのためにも私たち大人だけじゃなくて、子どもたちが緑という、身近な緑に対して心を向けてさせるようにしていかなければならないと思います。砺波は文化財もたくさんあります。まず、大人が語る前に、子どもたちの環境を整えてやるということが大事でないかと思います。その中で、遊ばせるということが一番大切でないかなあと、その緑の中で遊ぶ、その遊びという心があることによって、緑を学び、緑に親しむのだと考えております。なぜかという、今、庄東小学校のほうでは、山へ行って、ドングリのなる木を切りまして、炭を焼いて地域の活性化や皆さんのためにも、配ったりして色々やっております。山で木を切るのは、次の世代の活性化のために切るわけでありまして、屋敷林とちょっと違いますが、そういうことによって木というものは、ただ切るのではなく、炭となって地域みんなのためにも頑張ってくれているなあと、木を植えるときにも、炭を入れたりすることによって、皆さんも農業をやっておられる方、豆を植えるときに根粒菌が付きましますね。炭を入れると根粒菌が付きます。泥も、下の土壌を改良しない限りは、その木も育たない。それも今の散居村の景観の屋敷林を守るためには、そういう大人だけでなく、やはり三世代、四世代の子どもたちに伝えていくことが、私は砺波の景観を守る一番大切なことではないかなあと考えております。

最近の住宅事情もだんだんと変わってきております。緑がだんだん少なくなります。経済的なお金の問題もあると思いますが、そうではなくて、地域の皆さんと行政が一緒になって、これくらいの面積ならば、今から家を建てるときは、これだけの樹木を植えていただかないとCO₂の削減ができない。そのことも踏まえて、私たちだけでなく、ここにおいでる原野さんも住宅のほうで一緒懸命にやっておいでますが、そういう風にやっていかないと砺波のほうだけが取り残されて、もやもやとした空気の中に暮らしていてもいけないのではないかなあとそういう風に思っております。

やはり、緑というものは癒やしを与えてくれます。この中にいても、なかなか私の話はもやもやしていますが、外へ出て緑を眺めることによって、本当に心が癒やされる訳でございます。そういうことで、これからも環境を考えながら、子どもと一丸となり、お父さん、お母さん、家族全員が、緑は屋敷には、住宅には欠かせないものだ、と、私たちが一つ後押ししていく必要があるのではないかなあと考えております。私は商売柄ですが、庭造りをしてきて最後に黙って、一角二角程に花を植えてきます。そうすると、花というものは癒やしの効果がありまして、花を見て腹立つ人はいないと思いますが、ここ特に砺波はチューリップの産地であります。個々1軒1軒にチューリップが植えてあるかという、なかなか全戸に植えてあるのかは、私も見渡したことがないのですが、やはり皆さんが花を植える。そして、緑を楽しむことを皆さん方が、ある程度大人が奨励していくことが大事でないかと思っております。やはり、子どもたちが、庭の中で遊ぶ緑、芝生でもいいですし、苔を張ったりすることが大事でないかなあと考えております。

それと昨年、サクランボの木を学校に植えてきた訳です。そうすると、木をただ植えたのではなくて、サクランボがいつ成るのかなと、そういう風に子どもたちが特に真剣になって見てきます。また、卒業生が「いつサクランボ成るが」と、そのように緑に関心を持ってきます。そして、山形ではサクランボが有名ですが、ここはブドウもありますが、サクランボであれば、ちょっと摘まんでみたいと思うもので、そのことから緑に関心を持たせるようにすればどうかと思っております。そういうことで、砺波散居村の生業になればいいなあと、考えております。

出村：砺波平野のサクランボが、有名になればいいなあというような気がします。実際、砺波市には、庄川のユズもあります。産地化するにはなかなか大変な問題もあると思いますが、先程のイチジクとカキの木の話ではありませんが、家族で楽しめる、子育てに役立つ、あるいはお年寄りになって食べられる花と緑と実のなる木というのが、一つの屋敷林形成のキーワードでないかと思っています。第1回のときの柏樹さんの話でしたか、「各家に将来100年経った木が3本あれば、いい屋敷林になる」という話もありました。私の知っている市内では、東般若の石崎さんというお宅には、もう100年になっていると思いますが、立派なシダレザクラがあります。見えにくい場所なのですが、お庭の前へ行きますと、そのシダレザクラの下を潜らないと玄関へは行けないという設えになっています。今の代から言うとお爺ちゃんか、曾お爺ちゃんの代かに植えられた100年程前に植えられたサクラの木、それもシダレザクラですから、50年後、100年後にこんな形になるだろうと多分想定して植えられたものと思うのですが、庭から少し斜めに傾いている。その傾き加減の下を潜って、玄関へ向かうというすごい設えができています。私も大好きで、これで10数年来、通っておりますけれども、普通のサクラよりちょっと早いので、富山の松川のサクラが咲き始めたというのが良くニュースになりますが、あの頃にすぐに飛んで行かないと、ということで、4月始めには満開になるようなちょっと早めのサクラですが、素晴らしいサクラがあります。

各戸それぞれに、1本誇れる木があり、「45年経った、50年経った、80年経ったよ」と言って、代々受け継いでいけるような木が屋敷の中に1本、そういう意味では屋敷林はスギ林ではないということも、今日改めて確認をしていただいて、自分のシンボルツリーを作っていただくというのもいいのかなと思います。小さな庭しかない方でしたら、私の話で恐縮ですが、私はツゲを刈込んで、ウサギ年の私はウサギの刈込みをしております。今日のように雪が降りますと白ウサギになっています。そんな楽しみもあるかなと思います。我が家の緑化というか、花と緑という当たりも、これを機会に検討していただければと思います。

それでは、空き家ばかりの尾田さんですけど、空き家は一つの地域課題でありますし、市の行政としての課題、色んな規制、制約、更には対策、空き家の中には、話にもありますが村部の空き家と町部の空き家、あるいは団地の空き家とか、色んな段階もあります。防犯という面を含めた色んな問題がありますけれども、空き家を考える立場で尾田さんのほうからお願いしたいと思います。

尾田：一昨年、土蔵の会のほうでは、「砺波の元気は空き家の利活用から、空き家を地域資源として利活用を考える」というテーマでシンポジウムを行いました。非常に市民に関心が高く、散居村ミュージアムの会場がいっぱいになりました。150人以上が集まられたかなあとっております。市民にとって空き家は非常に関心が高い、関心が高いということは散居村における空き家の増加が非常に多い。その空き家というのは、地域社会の存続に大きな危機をもたらしている。将来的に限界集落のような状態になるのではないかとということで、その対策が喫緊の課題なのです。ところが空き家というのは、個人の所有物ということで行政もなかなか手が出せなかった。また、地域住民の方々も、避けて通っていたというようなことで、ここ1、2年になって吹き上げた問題ではないかなと思います。この空き家の実態をキチッと調査して、地域の将来はどうなるのだろうか。というようなことをしっかりと考えなくてはならないのではないかと。その中に、空き家バンクであるとか、空き家の利活用などが色々とされていますけれども、この空き家の利活用をすることによって、人口の増加、それから交流人口の増加が求められるのではないかなと思います。昨年から一昨年、砺波市のほうでは観光戦略プランというものができました。それによりますと「散居村、チューリップ、歴史文化など地域の宝を磨き、その魅力を広く発信することで交流・定住人口増を目指します」というなことを謳っています。本当にそうだなあと実感しております。

散居村というのは本当に、古くから研究であるとか勉強会、市民大学の勉強会、そういったものが本当に多く積み重ねられております。その積み重ねをこれから市民が研究から実践、それから勉強から行動、そして提案から行動、それから市民の無関心の打開ということが求められているのではないかなあとっております。これは、市民自らが立ち上がり、保全活用の実践が求め

られるということでもあります。個人の経済性、それから精神性、また文化性を豊かにすることが、市民みんなの願いではないかなあと考えています。散居村の保全活用、それによって地域の産業であるとか、経済・文化、それから個人の精神性、そういったものが活性化されるためには、散居村のブランド化、それを地域の魅力として発信するという。それは行政でなく、市民自ら発信するというのが大事なあと、それが一つ上の砺波ではないかなあと私は解釈しております。その応援というのは行政とともにやっていく、協働という形が一番いいかなあと思ったりしております。

出村：パネリストの皆さんからは、散居村を活用して地域の発展につなげるということについてお話いただきました。まずは、これを砺波全体で考えていくことを意識して、豊かで幸せになることを求めていく必要があるのだろーと思ひます。コーディネーターという仕事をいただきながら、自己主張はできるのですが、なかなかみんなをつなぎ、まとめるということが不得手であり、大変な仕事でありましたが、今日は散居村を活用する手段ということ全般にお話をいただきました。循環型の生活スタイルが見直され、注目されてきており、市民ニーズを見極める必要がある。現代に即した生活スタイルを議論する必要がある。あるいは、空き家の活用と一体的に散居村をPRしていく。先般、南砺市のほうでは、五箇山の合掌集落で暮らすという公募をしておりましたけれど、合掌造りの家で暮らす訳ではありませんが、合掌集落で暮らすということで、たくさん応募があったということでマスコミにも出ておりました。

隣が遠い砺波の散居村で暮らすというのも外に向けての発信材料かなあと思ひたりもしてひます。散居村における空間を生かしてということでは、広々とした空間が散居村の特長であるということについて情報発信をもっともっとしていくべきである。宅地の広さ、家屋の広さ、それと特長ある屋敷林、住まいというものを考えていく。生活空間に加えて、交流や生産の空間としての活用というものもあります。あるいは、健やかな子育て環境として適しているし、遊び場、散居村の保育所という話もありました。

それから、今後の発展に向けての具体的な話として、散居村との調和による地域の発展に向けては、個性あるまちづくりを進める上での組織と資金というのが必要である。環境事業というもののへの取組も必要であらうということでもあります。周辺の景観との調和を図る修景、リフォームという面についても支援が必要であらうということですが、これについては行政支援ばかりではなく、住民あるいは企業、市民レベルでの応援支援体制というものも作っていく必要であると思ひてひます。また、空き家のリフォームを行って提供していくシステムを作っていく必要があるということもあります。空き家については先程も言ひましたが、村部での空き家対策、それから町部、あるいは団地の中にも空き家が出てくる時代になりましたので、それらの防犯対策も含めた新しい空き家対策も真剣に検討していく時期に來ていることでもあります。

いずれにしても、散居村を活用するのであれば、手遅れとならないうちに、今のうちに進めなければならないと思ひ訳であります。そのためにも、市民の皆様と行政が一体となつて、地域の課題として考えていく必要があります。また、意識啓発と支援体制が重要となつてまいります。目に見え、肌で感じられる美しさ、快適さが体感できれば、多くの皆さんの共感が得られるものだらうと思ひます。市において取り組まれております景観に関する計画の良し悪しについても、これを機会にそれぞれ考えていただき、また持ち帰つていただき、家族家庭で、地域で話し合つていただきたいと思ひます。

時間のほうも過ぎておりますが、パネリストの皆さんで、どうしてもこれだけはということがございましたら御発言をいただきたいと思ひます。

宗景：皆さん方、多分御存知だと思ひますけれども、梅檀山の夢の平に展望台がござひまして、散居村が一望できるようになっております。

11月でしたか、日本造園学会という会がござひまして、その中部大会が富山大学のほうで開催された訳ですが、その時に名古屋のほうから名城大学の学長とか、信州大学、岐阜、そして富山県、色んな各方面から砺波に來ていかれ、散居村の景観はどうなつてひるのかと云うことで、新藤先生のところも見ていかれたのですが、最後にどういふことを言われたかという、「いやあ、

素晴らしいな」と夢の平から眺めたときに、「夕方で夕焼けも奇麗であった」ということあるのだけれど、「やっぱり、この景観はしっかり守ってほしいな」とそういう風にも言って行かれた訳でございます。

今日らは雪が降っております。PRでないのですが、リフトに乗られて鉢伏山の山頂から天気の良い日に砺波平野を眺めてください。あそこから見ますと呉東のほうも見え、そして二上山。全体360度は見えませんが、非常にパノラマでございます。折角、ここへお越しになったのですので、砺波の良さをもう一遍、再発見していただいて散居村、屋敷林をどうやって守っていくかを考えていただきたいと思います。

出村：冬場ですとリフトが動いているというメリットがあり、頂上まですぐに行けるという話でありました。夏場ですと、道路が庄川町のほうまで抜けておりますので、皆さん方も足を運ばれたかたもあるかと思いますが、私も夕焼けが奇麗な水田の時期に、夕方になるとそわそわして行くのですが、石川ナンバー、岐阜ナンバー、去年は所沢のプロの写真家がワゴン車で来ておりまして、昼は五箇山へ行って写真を撮って来て、夕方はここへ来ると、今日は2日目だというカメラマンに会いましたけれど、地元の皆さんでまだお気付きでない方がいるかもしれません。一度足を運んで、二度行ったよという方も毎日に行っても少し違う。何か違う。気象条件も違いますし、景色もどんどん変わっています。見ていただきたいなあと思います。

市としては、あそこに解説板、それから展望広場も少し拡張して作っておりますので、雪のときはリフトで、雪がなくなったら車で展望台の先まで行っていただいて、自分の家を探すということもあると思いますが、散居景観を堪能していただきたいと思います。

ほかにありますか。

尾田：今ほど、宗景さんの方から展望台から見る散居村が非常に素晴らしいと、あの点状の家々というのは、約7,000軒があると言われております。非常に奇麗です。特に5月頃、水田の張った風景、それから雪景色、非常に素晴らしい。素晴らしいのですけれど、実は屋敷林の家々が瀕死状態で空き家が多い、高齢化で年寄りだけの方が多い。もう瀕死状態と言っておきたいなあと思います。10年経ったらどうなるのだろう。もう20年経ったらどうなるのだろう。この奇麗な景観がなくなるのではないかと、そういった危惧をしております。空き家対策というのは本当に喫緊の問題で早急にやらなければならないなあと痛感しております。

出村：空き家を含めて、景観条例は先送りになっておりますけれども、今あるものを今、保全しなければ明日はない。真剣な取組が、今求められているのだと、今住んでいる我々に対する課題であろうと思います。そのこと当たりも意識していきたいと思います。

ほかにありますか。

原野：夢の平のスキー場のことばかり言って申し訳ございません。私はスキー場の麓にあります原野というところに生まれまして、砺波市の矢木のほうに御世話になって今年で23年目になる訳です。思い起こせば、夢の平スキー場は私も小学生の頃、牧場であったのです。あそこに牛がおりまして、その横にはバンガローが4つか5つかあったように思います。夏場になりますと、子どもたちがたくさんやってまいりまして、あそこでキャンプといいますか、そういう形でたくさん子どもたちで賑わったこともございます。

今、展望台は2つありまして、庄川のほうに向かったの展望台と頂上にある展望台と2つある訳です。そこの眺望は素晴らしいのですが、是非皆さん、そこにある素晴らしい望遠鏡を利用して見てください。夏ごろに友人と行き、私の家を望遠鏡で見ていると、80歳の母親が家の前で草むしりをしていたのが見えまして、そうしたら一緒にいた庄川の人が、「私の家も見てみる」といい、「みんな見えるわ」と感動していただきました。

実は、その眺望の中で、あそこに色んな鉄塔が重なってある訳ですが、あれがすごく無計画というか、眺望的にはいかがかなと思っております。大変に難しいことを言っているかと思いますが、その辺も少し検討していただければと思います。素晴らしい眺望が、より全国ネットに出

るようになるのかと思います。

私、スキーを子どもたちに教えている関係で山頂に行きますと、すぐにはスキーをさせないのです。まず、社会科の勉強をさせます。富山県の地図を思い出させて、例えば、能登半島、伏木のほうから今ですと新湊大橋があって、富山の火力発電所の煙突があって、というようなことで順番に社会科の勉強をするのです。そうすると子どもたちはすごく感激して、「今日は良く分かった、良かったなあ」と言って、スキーの先生ありがとうございますの中に、社会科の授業ありがとうございますと手紙をいただく訳です。そのようなことで、山頂の景観の整備をしていただければありがたいと思います。

もう一つ、建築の話ばかりしておりましたが、尾田さんがおっしゃっておられた空き家対策の件でございますが、実は私の生家がスキー場から見えるようなところにあります。離れて23年も経っていますけれど、私が小さいときは13軒あったのが、今4軒なのです。ちょうど20年間程は、空き家を貸してくださいということで次から次へと住んでおられました。今は私の都合で貸していません。初めて借りた人は、富山の方で画家の方でした。アトリエ代わりに貸してくださいということで、自分で北欧のストーブを入れられ、自分でリフォームされるなど勝手にしていただいていた。「家の畑も田んぼも自由に使ってください」ということで案内したら、「それはありがたい」ということで、自分の趣味も兼ねて10年間位されていました。それから、次の方は岐阜の方でしたか。夫婦で貸してくださいということで、何をするのかと聞くと「原野分校でパンを焼きたい」ということでパンを焼いて、5年間位住み継がれました。そのうちに子どもができて、その集落に久し振りに子どもができたということで、非常に嬉しく思っていた訳でございます。その次からは、パッチワークの60歳位のお婆ちゃんが1人で住み継いでいました。その人たちは、全部グループなのです。そういうグループの方にこういう楽しい、いいよ、いいよと言っていていただくことによって、次から次へと空き家対策が進むという気がしますので、そういうところをキッシンととらえて、PRをして家はこうなのだけど、こういったこともできるなどとプラスアルファのことも提供することによって、空き家というものも見直されてくるのかなあと思っております。

出村：展望台には双眼鏡も付いており、散居村の景観を鉢伏の頂上にも、下の道路沿いにもありますので、また活用して見ていただければと思います。

それでは、時間もちょっと過ぎておりますが、会場の皆さんから何か御発言がありましたら、挙手をして御名前を述べていただいて発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

はいどうぞ。

聴講：パネリストの皆さん。今日は興味深い話をありがとうございました。それで、原野さんと尾田さんに1つずつお聞きしてみたいと思います。

原野さんのところで2か月程前に、アズマダチをリフォームされて、東中だったか、西中だったかモデルルームとして開放されていたことがありました。アズマダチの家をリフォームされた方、施主の方の思いというか、そして、そこに来場された方々もそれを見て色々な感想を持たれたかと思えますけれども、アズマダチをリフォームして、そこに何かとマイナス面が強調されている中で、そこに住みたいと思われた考えなどを教えていただけたらと思います。

原野：その物件は、ワクノウチがあった物件でしょうかね。あれは実は建替えの新築でございまして、明治時代からの家だったと思いますけれど、初めて家にお邪魔した時、色々古材があり、そしてワクノウチがあると、その旦那さんが是非のワクノウチをどういう形でもいいので、残せないかということで調査をいたしました。外見から見ると本当のアズマダチを基本の理念で設計した物件でありますので、中は玄関からワクノウチの状況であります。ただ、今の御質問とちょっと違うのですが、90歳のお婆ちゃんが、出来上がってから本当に先祖から受け継いだ、こういう貴重なものをこういう形で残してくれたということで、本当に手を合わせて喜んでいただいたということでございます。それで、ワクノウチを使うとどうなるかということ、ワクノウチの上というのは、当然高い訳であり、使い勝手から言うと2階建ての家では非常に難しいのです。そこに階段

4 段階作りまして、三角のスペースを 2 階の若い人たちのお持て成しの部屋にして、そのような工夫をすることにより、若い人も含めて喜んでいただいた物件でございました。答えにはなっていないかもしれませんが、あれは再生をした新築でございます。

聴講：そのように、施主の方がアズマダチ、散居村、屋敷林も伴うものか分かりませんが、そういったものを是非とも残したいという気持ちをお持ちであったということですか。分かりました。

そして、空き家を利活用するということですが、空き家というよりも、もう高齢の人たちがお住まいをしておられるところに、例えば、就職や進学でこの地を離れた人々が、Uターンしてくれるという風なそういった仕組み、あるいは仕掛けということで、尾田さんに何か良い方法をお考えでないかなあと思うのですが。

尾田：難しいですね。まだ分からないというのが現状であります。こんなことをちょっと考えたりしているのですが、大きい家に老人の方が 1 人で住んでおられる。そういったものは、私らは準空き家というような表現をしているのですけれど、そういった準空き家のお婆ちゃんを御世話する若い他人が入るというのでもいいのかなあと、そういったきっかけづくりもいいのかなあと思ったりもします。そこに住んでいたアンちゃんやオッチちゃんは、高学歴で東京にて就職される。きっと、そのほうが生活はいいということで、こちらへ帰られないのだから、消極的な施策としては砺波が素晴らしいのだぞと、散居村というのはブランドで非常に素晴らしいということをアピールすると、そんな人たちも帰って来られるのではないかなあということを思っております。砺波というところは、東京よりもいいのだぞと、そういうことを僕は発信しなければならないと思っております。そうすると、東京へ行っているアンちゃんもこっちへ来て就職して、何と素晴らしいところに住んでいるのだなあと思われるような砺波になればいいなあと思っております。それが、川邊さんが言われたコミュニティであるとか、本江さんが言われる田舎だけど都会だという、そして就職もちゃんとできる。そのようなことがキシッとアピールしていけば、東京へ行ったアンちゃんも帰って来んなあと思ったりもしております。

聴講：前回のシンポジウムに出席された石崎さんのお話の中で、この市において散居村の三世代住宅の中で教育や福祉、介護というものが、きちんとされているということに触れられました。是非、そういった利点があるということで、行政が妻、子どもを連れてこの地に戻ってくる人たちに対して、例えば市民税を減免するとかという風な方法もあるのかなあと思ったりしています。そういった人たちが、ここに来ていただければ、例えば屋敷、家のリフォームといったこともあるでしょうから、そういった事柄が呼び水となってこの地において、色んな投資ということもまた起こるのではないかと考えたりしました。

出村：今日は市長さん以下、行政関係、市役所関係の方々、あるいは議員さん方、色んな方々が参加いただいておりますので、それぞれの立場での御検討をお願いしたいと思います。

ほかに御意見がありますか。

聴講：今、散居が瀕死の状態だとお伺いしました。今日の散居村の保全と活用シンポジウムということで、活用の部分は随分聴きましたけれど、保全という面では、私 3 回聴いておりますが、あまり具体的な案がない。砺波市の場合、昭和 41 年から転用された農地が 20 数%、地区によっては 1/3、35%位になっています。本質的に散居というのは、尾田さんが崇拝されている先生がおっしゃいますように、散居というのは景観ではない訳です。耕地の中の中心に住居を求め、自然発生的なものなのです。今日、佐伯先生が来ていらっしゃるか知りませんが、散居というのは、生産と生活が密着したものが散居の形態であって、アズマダチとか屋敷林は、その次の生活の知恵から生まれたことです。だから、そういう保全対策をしないと、いくら活用したってビジネスチャンスを狙うパネラーの皆さんの問題でないと思います。かつて砺波平野は、よくグラビアなんかに出ていました。絨毯なんか敷いたチューリップ畑が、あった訳です。今はもう、そういうことは全然ないです。散居だって、これから全くそうです。もう疲弊して、散居なんか誰も撮りませ

んよ。チューリップ畑を空から見る絨毯のような畦を見たいという方がたくさんいらっしゃるのです。チューリップフェアのとき、かつてはそういうことを見たから、もう1回来たのだと、四国から朝3時に出てきて来たのだと、いうお客さんがいっぱいいらっしゃるのです。だけど、チューリップ公園で見たって、こんなものどうでもいいですと、がっかりしたと帰られる人もいます。散居だって、全くそうです。世界遺産なんかと言ったって自然発生的に消えます。農水省の大規模農政で、そういう小さな農政がなくなっていくます。だから、どうすればいいのか。このシンポジウムで、そういう方をどう援農するのか、それから、砺波市の基盤的農業人口が70歳を超えているのです。そういうものを市民のシンポジウムで、どう応援するか。それから、農政として、どうフォローするのか、バックアップするのか、ということはこのシンポジウムで出してほしかったと思います。

皆さんに聞きますけれど、「となみ散居節」を知っている方、手を挙げてください。パネラーの方どうです？・・・これは（仙道）竹杖さんが作られて、平成3年には保存会もできました。平成17年には当時の市長さん、砺波市、砺波市教育委員会、砺波市観光協会、砺波市文化協会までがバックアップしてレコーディングまでされているのです。なんで、そういうものを使わないのですか。もっと皆さんに周知しないと、この歌詞を見ると、本当に素直な歌詞です。歌詞を見ますと、「雪解け水と人の情け」、皆さんのように美辞麗句なんか、一言も書いてないです。こういうものを何でもっと周知されないのか。それで、市民にどうだ、こうだと言っても、始まらないと思います。もっと足元にある、そういうポテンシャルとかを活用しないと。それで、どこかの真似事みたいなことをやってみたって駄目だと思います。砺波独自のクリエイティブな散居に向けた足音を立てなければならない。どこかで成功したから、それを真似ようなんてどうでもいいと思います。もっと、クリエイティブな考え方になってください。

出村：今程の御意見につきましては、少なくとも私とか、パネリストの皆さんが、個々に答えるような話ではないと思いますので、申し訳ございませんが、参加者の皆さん、今日の参加の成果として持ち帰っていただいて、自分は何ができるかという当たりを考えていただく、という趣旨であるかと思います。誰が答えるかという話ではないと思いますので、今日からこれ機会に、みんなで考えていくこととしたいと思います。

今年度、24年度の中で3回計画したのが今日3回目なので、今日結論が出る話でもありません。機会があれば、次年度以降も立場を変え、機会を変え、時を代え、場所を変えて、こんな議論をまだまだしていく必要があるのだらうと思います。その節は、積極的に関わっていただいて、新しいまちづくり、砺波市の新しい地域づくりに貢献をしていただければと思います。

ほかに、ございますか。

聴講：今、ちょっとかなりきついお話が出たので、それとは違うのですが、もう一つ話をします。

散居村というのは、多分3つの要素から成り立っているのかなあとと思っています。1つは周辺の農地を含めた景観。アズマダチとカイニョだけあっても散居村にはならないので、広い農地の中にカイニョのかかえた住宅がある。私は正直言いまして、今から40年程前に、100年も経っているアズマダチの家を壊しました。カイニョは残しています。周りの農地の保全にも一生懸命に取り組んでいます。それで、今お話があったように、まず農地の保全も非常に重要です。それから、新しい家が建ってもカイニョがある。もっと極端に言うと家が壊れて、カイニョだけ残っているところが少なからずあります。それでも、散居村が残り、ないよりもましかなあとと思っている訳です。これまではアズマダチとか、カイニョを残すというところに議論が偏っていたので、今みたいなお話が出たのだと思います。やはり、一番大事なのは周りの農地を残す。それから、新しい家が建っても、カイニョがあつて広々とした庭があれば、それはそれで散居村の景観でないかなあと思うのです。私はそういう風にアズマダチを壊したので、庭造りに頑張っています。先程、宗景さんがおっしゃったように、花のなる木を植える、実のなる木を植えると、非常にいいと思うのです。これまでのように燃料にスンバは要りませんので、あまり落ち葉の出ない木を植えて、それで精神的に豊かな生活を送って、山の上から見れば、それも十分な散居村の景観になると思うので、それでいいのでないかなあと 생각합니다。ただ、先程の話で想定外があるのは、

実のなる木というのは場所によってですけど、鳥や獣が出てきて、ほとんど収穫できないという地域もあるので、花も含めてカイニョの地域性にあわせて作っていただきたいと思います。

何を残すかという観点では、かなり宿題があるように思うのです。返事は特に求めませんが、もし何方かあれば、尾田さん当たり、あるいは出村さん当たりが適任者でないかなと思うのですけれど、何かコメントがありましたら、いただきたいと思います。

宗景：今程の農地の中の散居村景観については、砺波市の行政さんが昨年、一昨年から取り組んでおられまして、取り上げた訳ですが、一部色んな意見があって今、見直しておいでです。そういうことで散居村の景観を残すについてでも、農地の面積についてでも、色んなこと検討し、ここは工場団地にするとか、住宅だけにするとか、農地を残してやるとか、そういうことも今、計画を進めておいでるそうです。それでよろしいでしょうか。

それと実のなる木ですが、やはり今、熊が出たとか、何か言うことですが、熊が食べるのではなくて、私の言うのは、たまたま家のほうに春になると下手な鶯が実を摘みにきまして、なかなか「ホーホケキョ」までいきません。「ホー」で終わって、次の日は「ケ」までいくとか、そういうことでこういうところに鳥も来て、癒やし系があるのだなあと感じていただきたい。実もなかったら鳥も来ない。スギだけでは、来てもカラスが来て止まっていく程度であり、そういうことも踏まえて実もなる、そうすると子どもたちも、この実がなってどうなる。花が咲いてどうなる、という教育の一環にもなる。そして、そのような面に目を向けていただきたいと思っております。

答えになっておりませんが、そういうことでよろしく申し上げます。

出村：すみません。御意見がまだまだあるかと思いますが、時間を気にしている方もあるかなと思います。冒頭ありましたが、今日後ろのほうで、写真を展示していただいております。皆さん帰りにはゆっくり、改めて見ていただきたい。我々にとっては、当たり前のような写真もいっぱいありますが、名古屋の街なかにお住まいで、砺波平野が大好きで何度も何度も、何年にもわたって、足を運んでいただいている下里さんという御夫妻、夕べから前泊して、砺波へ来ていただいております。そして、写真を展示していただいております。下里さんのほうから一言、砺波に対する思いをおっしゃっていただければと思うのですが、お願いいたします。

下里：名古屋から来ております下里です。こんな過大なお褒めと受け取って、喜んで舞い上がっております。ここの富山へ最初に来たのは、昭和60年に青年の家と頼成の森を使つての研修に来ました。その時に、富山の中で砺波が特に、散居村というのがあって、屋敷林があってというそんな程度しか知らなかったのです。そのあと、あちらこちらへ行きますと、屋敷林というのは別にここだけでなく、沖縄にもありますし、風の強いところにはどこにでも屋敷林があるのです。それで、どこが違うのだろうかという思いで、そのときは忘れておりましたがチューリップフェアへ写真を撮りに来たときに、そうしたら今までに見たことのない風景、オランダかなと思うくらいのような風景です。後ろの写真展示の中の挨拶に書かせていただいたのですが、日本にない外国かと思うような景色だったのです。それは何かというと、向こう側に建物があり、手前の水面に映る水鏡です。本当はチューリップで来たのですけれど、チューリップをそのけにして、一般道でさっき見たのはどこだったろうかと、ずうっと探しながら走り回りました。それが最初です。一遍見たのですが、陽が落ちて、写真条件としては良くないので、また来ようということで、次の週に来たら、風があつたり、陽がうまくなかつたりと3回も4回も来て、最初の景色に出会えないのです。そのようなことから、何度も走って来ました。そのうち、名古屋に富山の観光案内所がありまして、そこで職員と家内が話をしておりました。民泊というツアーがあるということで、また、ここへ来させていただきました。おかげで、やはり人間関係と言うとおかしいのですが、話のできる方があると、だんだんと奥が深くなっていくのです。そういう意味で毎週のように、黙って走ってきては帰る。そんなことを繰り返して何年かの作品が、作品というほどでもないのですが、写真を会場の後ろに展示させていただきました。

何かというと確かに保全・活用は難しいと思いますけれど、名古屋では大須の商店街がすごく

活発だと言います。しかし、隣はすごく寂れかけているのです。空き家ができるのと寂れるのは、商店に限らずどこでも同じことではないかと思っています。そういう意味で、こういうシンポジウムが開かれるのは、危機感を持っておられる方が、それぞれ投げ掛けるということで、いかに受け止めていくかということが、我々の仕事じゃないかなと思っています。私の仕事は、老人ホームにまだ務めております。同じことがいえるのかなあとと思いますが、名古屋でも空き家が増えております。そこで、問題は高齢者の1人住まいをどうする、ということがいっぱいあります。問題は形が変わっても同じじゃないかなあとと思います。隣でもうやめろと言っていますので。

下里：妻です。よろしくお願いいたします。

主人と私の作品で、ちょっと掛けさせていただきました。本当に砺波大好きです。尾田さん、出村さんにお会いできたことが、一番良かったかなあと思っています。砺波の人に「何が大好きですか」と言われるのですけれど、「良く働き、良く勉強して、良く遊ぶ」という砺波の人が好きです。だからきっと、このシンポジウムのあとも、きっと皆さんでいい知恵が出て、いい活用ができるのではないかなあと私は思っています。これからの皆さんの活躍を祈っています。今日はありがとうございました。

出村：シンポジウムといたら皆さんが前向いてばかりと寂しいかなあといい、少し写真で色を添えたらと思いました。撮りためておいでる写真はいっぱいあるので、そのうちから5枚か10枚でも展示していただければ我々としては助かるなあといい話をしました。今回、お持ちいただいた春、夏、秋、冬の色分けしてありますが、60枚以上の写真を準備いただきました。また、後ろ右側にガーゼルに掛けてありますのは、それ以前に芳里家に寄附された写真で、今回、尾田さんに借りて来ていただいて展示いただきました。全体の写真、今回は置いていっていただけるということですので、機会があればまたどこかで展示をしていきたいなあといいと思います。外から砺波を見て、このような評価をしていただいている方がいるということをお我々自身、先程の新聞記事の話ではありませんが、宣伝下手は言い訳であって、我々の足元の宝物をもう一度見つめ直そうという機会ではないかなあといいと思います。

集約をして終われという指示がでておりますが、前回までの部分につきましては、先程説明があり、正確に記録をしていただいたものが皆さんの御手元にっておりますので、省略させていただきます。今日の話の中身としまして、散居村というのは、家屋や屋敷林、そして農地という3つ要素というのがあります。のみならず、文化や生活など様々な要素が関わっているということでもあります。これらを含めて散居村を活用する手順としては、生活スタイルを意識しながら、空き家も活用して地域風土に合ったまちづくりを進める。また、散居村の特長である広々とした空間を生かして、周辺景観との調和を図り、個人個人が楽しみながら経済的な豊かさを求めている必要がある。そのためにも、子育てをキーワードにするなど、地域住民が自らの課題として考えていく必要があるのだらうと思いいいます。

私自身、土蔵の会やカイニョ倶楽部などにも関わらせていただいておりますけれど、自分にいっつも思ふことは、「楽しくなければ始まらない」ということだと思いいいます。住んでいる住民自身が、砺波を好きになって、いいところ見つけて、楽しんでいく。楽しくなければ始まらない。楽しいから始まっている、続いていくという地域づくりになっていけばいいかなあといい思いいいます。ちょっと時間が長くなりましたけれども、以上で本日の第3回のシンポジウムまとめにはなりませんが、24年度のひと区切りとさせていたきたいと思いいいます。

今後とも、こういう機会が続いていくことを祈念して私仕事を終わらせていたきたいと思いいいます。コーディネーターという役が務まりませんでしたけれども、御協力をいただきましてありがとうございました。

構：どうも、ありがとうございました。

本日のパネルディスカッションでは、様々な御立場から、散居村の活用と地域の発展について、意見交換を進めていただきました。

このたびのパネルディスカッションでの討議等を踏まえ、散居村を活用して市勢の更なる発展

や活性化など、新たな展開へのスタートにしていきたいと思います。

それでは、パネリスト並びにコーディネーターの皆さんに、今一度、盛大な拍手をお願いいたします。

《拍手》

ありがとうございました。

以上でパネルディスカッションを終了いたします。

本日のシンポジウムの結びに当たり、本実行委員会 中西美代委員が閉会の挨拶を申し上げます。

◆閉会挨拶◆

中西：本日、御正月最後の日曜日と何かとお忙しい中、皆様方にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。冒頭にシンポジウム実行委員の島田さんから経過報告がありましたように、今回は市民と行政の協働による実行委員会を組織して取り組んでまいりました。

2か月間隔で3回実施いたしまして、本日はその最終回となっております。その間、約500名の皆様にお聞きいただきました。講師並びにパネリストの皆さん、そして会場内からの貴重な御意見や御提案も賜りました。今後、散居村を活用したまちづくりの方向性が見えたように思われます。中でも、本日のパネルディスカッションにおきましては、現実の生活スタイルから、どのような新しいスタイルが可能なかなど、これからの生活を考えるうえで、良い機会となったのではないのでしょうか。先日、新聞にも載っていましたが、行政では空き家条例を考えていくと書いてありました。今後、これを散居村と共存していくための出発点でもなるように思われます。

今後とも、多くの皆様と共に、ここ砺波市の個性ある散居村をどのように活用して、豊かな市民生活を育み、地域の発展を考えてまいりたいと思います。

終わりにになりましたが、御出演いただきましたパネリストとコーディネーターの皆様、また、御聴講いただきました多くの皆さんに、心から感謝申し上げまして閉会の挨拶とさせていただきます。

足場は悪うございますので、お気を付けてお帰りくださいますように、本日は誠にありがとうございました。

構：会場の皆様には、長時間にわたりご聴講をいただき、誠にありがとうございました。

お帰りの際には、受付でお配りしたアンケートに回答の上、出口で係員にお渡ししたいと思っております。

これを持ちまして、散居村の保全と活用シンポジウムを閉じさせていただきます。

どうも、ありがとうございました。

以 上